

万葉集の英訳について

ワトソン・マイケル

はじめに—万葉集英訳の種類と英訳の現在—

ご存じの方も多であろうが、ペンギンブックスから1964年に *Penguin Book of Japanese Verse* (『日本の詩歌』) という本が出版され、東洋文学に関心のある英語圏の読者をそれなりに獲得した。そこには、記紀歌謡と万葉集からも60ページにわたって英訳が載せられている (Thwaite/ Bownas 1964: 3-67)。万葉集においては、リービ・英雄の英訳が1981年に出て、該書の表紙には volume 1 (第一巻) とあり、しかも序文にて明確に継続巻の予告をしているのであるが、この後リービ訳は出なかった (Levy 1981)。リービは日本語で書く小説家として成功し、また万葉関連の書物も3冊ほど出版しているが、そのどれもが基本的に日本人向けか、一般読者向けの本である (Levy 2000, 2002, 2004)。それらの著書の中では、巻五以降の万葉歌の翻訳もしてはいるのだが、基本的にリービ訳万葉集は最初の一冊、巻五までの翻訳で終わっている。

いま、万葉集英訳を一覧にしてみたのが表1 (1891～2015) である。この表を参照しながら、現在の万葉の英訳はどのような状況にあるのか簡単に確認しておく。リービ訳が出た1981年以後、他の主な日本古典文学を見るなら、源氏物語の完訳が2種類出版され、平家物語の完訳も2種類出ており、これら以外の古典作品も多数訳されている。万葉集に関して言えば、1929年から1963にかけて、オランダ人学者ピアソンによる全訳が、1967年に本多平八郎による全訳が、そして1991年に須賀照雄による全英訳が出版されている (Pierson 1929-1963; Honda 1967; Suga 1991)。本多訳、そして特に須賀訳は専門家の手による翻訳ではないばかりではなく、実は海外ではその存在は殆ど知られていない。このように万葉集にも全訳は存在するのだが、敢えて言うなら、現状では日本研究に携わる外国人研究者のだけれども、海外の万葉を専門とする研究者による全訳を待ち受けているというのが正直なところである。

万葉英訳の歴史は、明治時代のお雇い外国人チェンバレンの時代からであるので、意外に長い。だが、本稿においては比較的新しい万葉集の英訳を取り上げながら、万葉集の英訳の現状を再確認し、同時に枕詞の英訳などを中心に検証しながら、翻訳がどのように変化してきているのかということについて考察を加えたい。新しい英訳として、クランストン訳、それからボビン訳、ダシー訳の3つを取り上げる。まずはこの3点のうち、最もオーソドックスな翻訳と言えるクランストン訳からみていきたい。

表1 主な翻訳 (1891～2015)

| | 翻訳者 | 翻訳者 出版年 | 歌番号の有無 | 原文の有無と表記法 | 歌数 (総計) |
|---|-------------|---------------------|--------|-----------|---------|
| 1 | チェンバレン | Chamberlain 1891 | △ | 無 | 68首 |
| 2 | ディキンス | Dickins 1906 | △ | ローマ字 | 264首以上 |
| 3 | ウェリー | Waley 1919 | 有 | ローマ字 | 58首 |
| 4 | ピアルソン | Pierson 1929～1963 | 有 | 万葉仮名 | 全訳 |
| 6 | 日本学術振興会 | NGS 1940 | 有 | ローマ字 | 1000首 |
| 7 | スウェイト・ボーンラス | Thwaite/Bownas 1964 | 無 | 無 | 82首 |

| | | | | | |
|----|---------|------------------|---|-------|--------------|
| 8 | 本多平八郎 | Honda 1967 | 有 | 無 | 全訳 |
| 9 | 佐藤・ワトソン | Sato/Watson 1981 | 無 | 無 | 263 首 |
| 10 | リービ | Levy 1981 | 有 | 無 | 906 首 (巻1～5) |
| 11 | ドー | Doe 1982 | 有 | 無 | 398 首 |
| 12 | カーター | Carter 1991 | 有 | ローマ字 | 104 首 |
| 13 | 須賀照雄 | Suga 1991 | 有 | 無 | 全訳 |
| 14 | 克蘭ストン | Cranston 1993 | 有 | ローマ字 | 1329 首 |
| 15 | シラネ | Shirane 2007 | 有 | ローマ字 | 78 首 |
| 16 | ボビン | Vovin 2009 | 有 | 万葉仮名等 | 208 首 (巻15) |
| 17 | ボビン | Vovin 2011 | 有 | 万葉仮名等 | 309 首 (巻5) |
| 18 | ボビン | Vovin 2012 | 有 | 万葉仮名等 | 238 首 (巻14) |
| 19 | ダシー | Duthie 2014 | 有 | 万葉仮名等 | 77 首 |
| 20 | ボビン | Vovin 2014 | 有 | 万葉仮名等 | 224 首 (巻20) |
| 21 | ボビン | Vovin 2015 | 有 | 万葉仮名等 | 142 首 (巻17) |

(各英訳の書誌情報は参考文献を参照のこと)。

1. クランストン訳

克蘭ストン訳についての統計的なことは、表2に載せたが、氏のライフワークである膨大な和歌アンソロジーの中において、万葉歌の英訳は1329首ある。各歌英訳には詳細な注釈が付き、原典もローマ字で載せられている。克蘭ストンは、万葉20巻の構成を独自に組み直し、3つの大きなセクションに分けている。表には参考の為に歌の翻訳数が多い日本学術振興会訳の分布も併せて載せておく。

表2 巻ごとの分布 日本学術振興会訳 (NGS 1940)、克蘭ストン訳 (Cranston 1993) との比較

| | 巻一 | 巻二 | 巻三 | 巻四 | 巻五 | 巻六 | 巻七 | 巻八 | 巻九 | 巻十 |
|----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 84 首 | 150 首 | 249 首 | 309 首 | 114 首 | 161 首 | 350 首 | 246 首 | 148 首 | 539 首 |
| 日本学術振興会訳 | 50 | 86 | 137 | 66 | 48 | 82 | 27 | 37 | 44 | 33 |
| 克蘭ストン訳 | 70 | 90 | 144 | 184 | 75 | 79 | 73 | 95 | 45 | 66 |
| | 巻十一 | 巻十二 | 巻十三 | 巻十四 | 巻十五 | 巻十六 | 巻十七 | 巻十八 | 巻十九 | 巻二十 |
| | 490 首 | 380 首 | 127 首 | 230 首 | 208 首 | 104 首 | 142 首 | 107 首 | 154 首 | 224 首 |
| 日本学術振興会訳 | 43 | 11 | 66 | 26 | 38 | 39 | 41 | 25 | 49 | 56 |
| 克蘭ストン訳 | 82 | 16 | 41 | 40 | 85 | 52 | 53 | 22 | 23 | 31 |

克蘭ストン訳第1セクションは、Poems by Named Poetsとし、名前が明らかになっている万葉歌人をおおよそ時代順に並べ、それぞれの歌人の歴史文化背景を説明し、更に歌も出来るだけ時代順に並ぶように配慮している。このセクションにおいては、万葉歌人についての概要を掴むことができ、またその歌人の歌の特徴や詠みぶりや、ある種の歌言葉の傾向についても学ぶことが出来る。第2セクションは、Poem Exchanges, Poem groups of multiple compositionとし、贈答歌や、挽歌、従駕歌、防人

歌などクランストンがテーマ分けできると考えたものをグループ分けして集めてある。一例をあげれば、松浦川に遊ぶ歌群等である。第3セクションは Anonymous として、一番短いセクションで、約300首の無記名和歌を集めてある。そしてこのセクションだけは、万葉の巻の順に従って歌を並べている。

以上がクランストン訳万葉和歌の構成だが、簡単に言えば、クランストン訳は万葉歌人として名前が遺っている歌人の歌に大きな比重を置いているのである。

2. ボビン訳

今一番新しい万葉英訳としてあげなければならないのは、アレクサンダー・ボビンの万葉訳であろう。現在6巻が出版されており、今後残り14巻が出版される予定である。だいたい1年から2年に一冊の間隔で出版されているのでかなり長期にわたるプロジェクトである。ボビンはこれを New English Translation (新しい英訳) と呼んでいる。ボビンは無論全訳をめざしているわけであるが、「英語を母国語としていない」言語学者による全訳だということは、まず指摘しておかねばならないであろう。表1には、全訳の区別を記してあるが、見てわかるとおり、全訳をなしたのは、オランダ人、そして、二人の日本人であり、ある意味、英語を母語とする人間として、これは本当に恥ずべき事で、反省すべき点でもある。

ボビンの英語がどんなに流暢であっても、やはり英語を母語とする人間の英語ではなく、英語を母語とする人間にとって、このことは本当に重要な事なのである。

ボビンは2009年、第15巻の序言の中で、「英語の文法や用語法を乱さないで、出来るだけ直訳を心がけた」と書いている。そのせいかどうか、ボビンの英語には多少の問題がたまに見受けられる。ただ、大半においては、ボビンが理解した和歌の解釈を英語できちんと明白に伝え得ているとは言えよう。

ボビンは全編にわたってレイアウトにおいて統一された次のような形式を採択している。

ボビン訳の構成 (レイアウト)

本文・Original Text

仮名の書き下し・Kana transliteration

ローマ字・Romanization

形態素の分析・Glossing with morphemic analysis

翻訳・Translation

解説・Commentary

今、一例を次に示しておく。

本文・Original Text

(1) 阿佐里須流 (2) 阿末能古等母等 (3) 此得波伊倍騰

(4) 美流尔之良延奴 (5) 有麻必等能古等

仮名の書き下し・Kana transliteration

(1) あさりする (2) あまの2こ1と2も2と2 (3) ひ1と2はいへ2と2

(4) み1るにしらえ2ぬ (5) うまひ1と2の2こ1と2

ローマ字・Romanization

(1) asar-i s-uru (2) ama-nō kō-Ntōmō tō (3) pītō pa ip-ē-Ntō 以下省略

形態素の分析・Glossing with morphemic analysis

(1) fish-NML do-ATTR (2) fisherman-GEN child-PLUR PT (3) person TOP say-EV-CONC 以下省略

翻訳・ Translation

(3) Although you say (2) that you are daughters of fishermen (1) who do fishing,

(4) when [I] looked at [you], I realized (5) that [you are] daughters of noblemen.

解説・ Commentary (省略)

本文というのは英語で original text とあり、万葉仮名のテキスト本文のことを指している。そして、引用例からもわかるように、各句に (1) から (5) の番号を付けている。次が、仮名の書き下し、そしてローマ字にした本文、Romanization が来ているが、これは言語学的な表記法による奈良時代の発音を表した特殊なローマ字表記となっている。次の Glossing with morphemic analysis は、形態素の分析、一見良く高校生の古文の参考書などにある活用を本文脇に記したようなものにも見えるのだが、もちろん言語学的な理論に則った非常に高度なものである。そして次に、ここで話題にしたい Translation、翻訳が来ている。そして最後が Commentary、解説となっている。

このレイアウトは、ポビン訳万葉歌すべてにわたって同じなので、この点大変明解であり、また、仮名の書き下しの部分にある、1と2の小さな数字は、万葉仮名の甲類乙類を示している(例:あまの₂こ₁ど₂も₂)。同じく Romanization の部分でもこの区別を示しているが、今度は1と2という数字では無く、何故かアクサン・シルコンフレックスとウムラウトの記号を使って示している(例: ama-nō kō-Ntömō)。このローマ字部分は実は言語学を専門としていなければ、殆ど読むことができない。

さて、肝心の翻訳の部分のみていきたい。既述したが、ポビンは本文、書き下しともに各句に (1) から (5) というように数字を付けている。翻訳の部分を見ると、その番号があちらこちらに移動しているのがわかる。もちろん日本語を英語にするときは、語順が違うので、後ろから訳していくということは良く起こることで、時々避けられないことである。が、技術のある翻訳者の場合、語順をあまり変えずに翻訳するということが、案外上手く出来ることが多い。語順を変えてしまうと、ある種の万葉歌ではその意味が薄れてしまうと言える。例えば、寄物陳思歌などや、序歌などのように、比喩的な意味が最初に来る場合、語順を変えて翻訳してしまうと、英訳されたもの全体がただの説明文となってしまう、散文的になってしまう嫌いがある。更に本文や書き下し文とならべて読むときに、あちらこちらに目を移して読まなければならず、実は、かえって、分かりにくくなってしまうことは、言うまでも無い。

今このことを克蘭ストン訳と比べながら以下、確認する。次の引用例は、まず原文、そとあとに便宜上漢字仮名交じりを載せてある。

(原文) 武蔵野之 宇良敝可多也伎 麻左旦尔毛 乃良奴伎美我名 宇良尔旦尔家里 (14:3374) ³

(1) 武蔵野に (2) 占へ象焼き (3) まさでにも (4) 告らぬ君が名 (5) 占に出にけり⁴

ポビン訳の日本語原歌に付けられている番号はそのまま付けておいた。次がその、ポビン英訳である。

(4) The name of [my beloved] lord which [I] did not tell [to anyone] (3/5) became clearly known through divination (2) when a diviner burnt [deer] shoulder [blade] (1) at the MuNsasi plain. (Vovin 2012:64)

更に以下が克蘭ストン訳である。

| | |
|-------------------|---------------------------------|
| Muzashino ni | On Muzashi moor |
| Urahe kata yaki | The diviner burned the bone— |
| Masade ni mo | Sure, the truth was there: |
| Noranu kimi ga na | Your name that I'd never spoken |

ボビン訳は(4)の「告らぬ君が名」から始まっている。そして、それに、日本語の3句目、5句目が続き、そのあとに2句目に戻ってきて訳し、最後に1句目の訳、at the MuNsashi plain (「武蔵野に」)が来る。克蘭ストン訳は、まず見た目のレイアウトが全く違い、5行訳である。短い五文字の句は、最初と三句目だが、字下げしてあり、一瞥ではっきりとした型が意識される。訳は、日本語の原典と同じ、「武蔵野に」On Muzashi moor とはじまり、以下の句もすべて、原典の順序通りに翻訳されている。そしてもちろん意味も正しく伝えられている。もう一点だけこの克蘭ストン訳で付け加えると、英単語の音節の数が、五七五七七の数にあわせてある。4句めだけが、ちょっと1音節多くなっているが、最近はこの音節を合わせる翻訳が、俳句だけではなく、和歌の世界でも一般的になってきているようである。ただし、これはやはり誰でも出来るものではない。音節を合わせると同時に意味もきちんと伝えなければならず、またローマ字で原文も載せているので、古典日本語が理解できる人たちに対して、翻訳者はごまかしができないわけである。このひとつの英訳の例だけでも、英語を母語とする人間にとっては、ボビン訳と克蘭ストン訳を比べると、圧倒的に克蘭ストン訳に軍配があがるということになる。

もちろん、ボビンは、学問的で直訳的で、文法に大きな比重をおいた訳なので、その限りにおいては目的を果たしている。今後西洋における万葉集の研究者にとって、ボビン訳が重要な資料となることは疑いない。氏はもちろん、特殊な言語学の専門家に向けてこの仕事をしているわけであり、書物の価格からも、大学図書館などに備え付けられる性格のものである。防人歌や東国の歌が入った後半の巻を先に出版しているが、これは氏が地方の方言などに強い言語学的な興味をもっている事による。繰り返しになるが、ボビン訳は学問的に重要な仕事であることははっきりとしているのである。だが、やはりボビン訳は文学としての万葉集の和歌の美しさ、情感などは殆ど伝えていないのである。文学的な翻訳という問題を置き去りにしている。そういう翻訳がボビン訳なのである。さて、次にダシー訳をみてみたい。

3. ダシー訳

これも万葉研究者であるなら、周知のことであるが、ダシー訳と言っても、トーキール・ダシー (Torquil Duthie) が万葉集英訳を出版したわけではない。2014年に出版した氏の万葉研究書の中において、およそ50首以上の万葉歌を英訳し、またハルオ・シラネ編集の古典文学アンソロジーの中でも32首の万葉歌を英訳しているので、若い研究者による新しい万葉和歌の英訳という点からも取り上げてみる価値があると思われる (Shirane 2007; Duthie 2014)。

克蘭ストン訳、ボビン訳でのページレイアウトをみたが、ダシー訳は、研究書においては、以下のように、英訳を左側、そして右側にローマ字と万葉仮名を併せて載せている (2:201; Duthie 2014:316)。

| | |
|--|---|
| In the enclosed march of Haniyasu Lake | paniyasu no ike no tutumi no 埴安 乃 池 乃 堤 乃 |
| the courtiers are lost and do not know | komorinu no yukupe wo sirani 隠 沼 乃 去 方 呼 不 知 |
| which way to go | toneri pa matou 舍 人 者 迷 惑 |

研究書と言ったように、その著書におけるダシー訳は単なる翻訳ではなく、万葉の研究書の中で、論証と分析の為にピックアップされた万葉歌がいくつか翻訳されているわけである。それでも一応新しい英訳の傾向をみる事ができる種類の英訳だと思われる。特に歌の分析の中において、ダシーは翻訳について検証し、考察を加えている所がたくさんある。例えば、次の例のように、氏は二つの解釈が可能な同じ歌を別な訳仕方で2回訳してみせ、その違いを詳細に分析している。その意味においてもわずかな

歌しか英訳はしていないのであるが、万葉の翻訳としてダシー訳を取り上げて比較検討する意味は大きいのではないか。

原文 真草苺 荒野者雖言 葉過去君之 形見跡曾来師 (1:47)

ま草苺る 荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とそ来し

"Though it is but a wild field with pure grass to cut, / I have come here to remember my lord who passed away / like the autumn leaves." (Duthie 2014:224)

"Though it is but a wild field with pure grass to cut, / we have come here to remember our lord who passed away / like the autumn leaves" (Duthie 2014:375) (下線ワトソン)⁵

以上、比較的新しい3種の英訳の概観をみてきた。次に更に細かな翻訳の問題として、特に枕詞の英訳に注目してみたい。

4. 枕詞英訳の変遷

枕詞の英訳を時代的に眺めてみると、比較的古い英訳においては、大きな流れとして、枕詞そのものを翻訳しないという傾向がある程度あった。これはリービ英雄の訳でも時々みられたことで、氏も枕詞を訳さずにスキップすることがあった。だが、今みてきた比較的新しい三人の英訳の時代になると、基本的に枕詞はなるべく英訳するようになってきているか、何らかの形で翻訳に反映されるようになってきている。必ずいつも訳されているというわけではないのだが、新しい英訳は、枕詞を翻訳する傾向にあるということは、大きくは言えるであろう。次に具体例をみていく。

【たたみけめ】一般的にはあまり知られていない枕詞かも知れないが、まず「たたみけめ (畳薦)」という枕詞をとりあげる。クランストン訳、ボビン訳、フランス語訳のシーフェール訳、そして須賀訳をそれぞれ次に引いておく。

(原文) 多々美気米 牟良自加已蘇乃 波々平波奈列旦 (20:4338)

たたみけめむらじ はなりそ
畳薦牟良自が磯の離磯の母を離れて行くが悲しさ

クランストン訳 (Cranston 1993:1236)

| | |
|-------------------|-----------------------------|
| Tatamikeme | Yonder rocky shore |
| Muraji ga iso no | Of <u>woven-mat</u> Muraji |
| Hanariso no | Island far away; |
| Haha o hanarete | Far away from my mother |
| Yuku ga kanashisa | Have I gone—oh the sadness. |

(下線ワトソン、以下同。尚ワトソン一箇所の誤字訂正)

ボビン訳 (Vovin 2013:84)

(5) Sadness of going, (4) being separated from [my] mother, (3) like rocks [in the sea] are separated

(2) from MuraNsi rocky shore (1) (makura-kotoba)

シーフェール訳 (Sieffert 2003:323)

[Tatamikémé]
grève de Muraji grève

écartée
de ma mère m' écartant
aller au loin ah ma tristesse

須賀訳 (Suga 1991:379)

As the mat-sedges
Grow alone on Muraji Beach,
All alone I go,
Far separated I go,
Parting from mother, to my grief.

クランストンは意味をそのまま直訳的に訳して Woven-mat (編まれた敷物) と訳すが、ボビン訳では、翻訳はしないで、括弧に入れて (Makura-kotoba) と書いているだけである。またフランス語訳では角括弧に入れてローマ字で Tatamikeme と書いている。翻訳はしていない。クランストンは英訳をしている。注釈を付けて説明したり、翻訳の中に説明を加えたりはしていない。一方ボビン訳は、見てのとおり英訳はしていないのだが、この枕詞に関して非常詳しい解説を載せている。ボビンの解説は語源などまでにさかのぼっていることもあるが、おそらく全体としては枕詞に関して、日本の最新の研究成果を盛り込んだ、西洋における枕詞の研究という観点において、現在最も重要なものだと言えよう。

次はよく知られた枕詞の英訳である。

【あをによし】福井久蔵の『枕詞の研究と釈義』によれば、諸説あるが、「古くからこの土地で良い青土が出たので」というような説明があり、多くはこの説に拠っている。ボビンは言語学的な観点からこの説に賛同している。以下少し古い訳から順に引いてみる。

(原文) 太宰少式小野老朝臣歌一首

青丹吉 寧楽乃京師者 咲花乃 薫如 今盛有 (3:328)

あをによし奈良の都は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり (下線ワトソン以下同)

日本学術振興会訳 (NGS 1940:282)

The Imperial City of fairest Nara
Glow now at the height of beauty,
Like brilliant flowers in bloom.

佐藤・ワトソン訳 (Sato/Watson 1981:43)

The city of Nara of good blue clay glows like a blooming flower, now at its prime

リービ訳 (Levy 1981:183)

The capital at Nara,
beautiful in blue earth
flourishes now
like the brilliant fragrance
of the flowers in bloom

リービ訳 (Levy 2003:174)

The capital at Nara,
beautiful in green earth
flourishes now
like the luster
of the flowers in bloom

クランストン訳 (Cranston 1993:337)

Aoini yoshi The royal city,

| | |
|-------------------|-------------------------------------|
| Nara no miyako wa | Nara of <u>the blue-green earth</u> |
| Saku hana no | Like blossoming trees |
| Niou ga gotoku | That shimmer into fragrant bloom, |
| Ima sakari nari | Is at the height of splendor now. |

参考までに、シーフェール仏訳において、「青丹与之 平城（あをによし奈良）」(19:4245) は、"la Ville de Nara / à la belle terre blue" (美しい青土の奈良の街) と訳されている (Sieffert 2003:291)。学術振興会の訳では、定説に拠って訳しているというよりも、「最も美しい」という意味の単語 fairest を使っている。大意的だと言えよう。佐藤・ワトソン訳以後はこの「青い土」という説を踏まえて訳しているのが明らかである。翻訳者によっては、こういうよく知られた枕詞を訳す時に、次に引いておくが、比較的似たような単語や語句遣いで訳すということもある。明治期の英語圏における万葉研究のパイオニアといえるディキンス訳である。

【ディキンス (1909 年) の「青丹よし」の翻訳】 (Dickins 1906, vol. 2)

| | |
|---|---|
| "well-founded Nara! | 1:17 (p. 9), 1:79 (p. 19), 1:80 (p. 20), 17:3979 (p. 248) (well-founded は「堅固な基礎」の意) |
| "City-Royal / Nara's well-founded city" | 19:4245 (p. 291) |
| "well-laid Nara" | 1:29 (p. 10) (well-laid は「良く踏みならされた」の意) |
| "well-laid City-Royal" | 17:4008 (p. 257) |
| "Nara—with oak trees ever green—" | 13:3236 (p. 176) (oak trees ever green は「青い檜の木々」の意) |
| "green-oaked Nara" | 13:3237 (p. 177), 17:3957 (p. 236) |

先のリービ訳に戻るが、リービ訳はディキンスのスタイルで似たような語句を同じ枕詞使っている。リービの訳はいろいろな決まり事に縛られない、現代詩や自由詩のような感覚で訳されているので、同じことばを好きなところに自由に挿入できるということがあるからだ、とも言える。またダシー訳もある種の枕詞には同じ表現を使って訳している。ただ、例えば克蘭ストン訳では、先述したが、五七五七七に音節の数を合わせるという方法で訳しており、その音節の数を合わせることを優先するので、場合によっては違う言葉を使い、異なる構成句にし、異なる品詞を使用するというように、変化させている。

【ぬばたま】周知のように、射干（ひおうぎ、射扇）の実という説と、黒い玉という説があるが、当該枕詞の英訳は、基本的に三つに分かれる。以下（１）として「pitch-black（真っ黒）を使う訳」、（２）として「black as leopard-flower seeds とか berry black を（檜扇の実のように黒い）を使う訳」、（３）として『『黒い玉』としての訳」、そして（４）は「その他」とするが「同じ歌の異なる英訳者による訳」をあつめて、それぞれ以下に引用する。

(1) pitch-black (真っ黒) を使うリービ訳の例

(原文) 久堅之 天見如久 仰見之 皇子之御門之 荒卷惜毛 (2:169)

あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜しも

The crimson-gleaming sun / still shines, / but that the moon is hidden /
in the pitch-black night it crosses— / alas! (Levy 1981:116)

(原文) 宇豆都仁波 安布余志勿奈子 用流能伊昧仁越 都伎堤美延許曾 (5:807)

現には逢ふよしもなしぬばたまの夜の夢にを継ぎて見えこそ

There is no way for us / to meet in reality, / so come before my dreaming eyes / night after
pitch-black night! (Levy 1981:353)

(原文) 夜干玉之 妹之黒髪 今夜毛加 吾無床尔 靡而宿良武 (11:2564)

ぬばたまの妹が黒髪今宵もか吾がなき床になびけて寝らむ

Tonight too / does my woman's pitch-black hair / trail upon the floor / where she sleeps without
me? (Levy 2000:110)

(2) black as leopard-flower seeds とか berry black を (ひおうぎ (檜扇) の実のように黒い) を使う訳

(原文) 夜干玉之 夜者須我良尔 (4:619) (大伴坂上女郎怨恨歌より)

… ぬばたまの夜はすがらに …

佐藤・ワトソン訳 (Sato/Watson 1961:63)

“… All through the night black as leopard-flower seeds …”

(3) 「黒い玉」としての訳

(原文) 奴波多麻能 欲波安気奴良之 多麻能宇良尔 安佐里須流多豆 奈伎和多流奈里 (15:3598)

ぬばたまの夜は明けぬらし玉の浦にあさりする鶴鳴き渡るなり

ボビン訳 (Vovin 2009:55)

It seems that the night [dark] as pitch-black jade has dawned. [I] hear cranes crying and flying
away that were searching for food in the bay of Tama.

(原文) 古家丹 妹等吾見 黒玉之 久漏牛方呼 見佐府下 (9:1798)

古に妹と吾が見しぬばたまの黒牛濁を見れば寂しも

ダーシー訳 (Duthie 2014:344)

In the past my girl and I looked upon it together, on this gem-black, bay of Kuroushi that I now
feel grieved to see

(4) その他。同じ歌の異なる英訳者による訳

(4a) (原文) 烏玉乃 夜霧立而 不清 照有月夜乃 見者悲沙 (6:982)

ぬばたまの夜霧の立ちておほほしく照れる月夜の見れば悲しさ

佐藤・ワトソン訳「檜扇の実」(Sato/Watson 1981:66)

Black as leopard-flower seeds / is the night-mist spreading round; /

and through it all the moonlight comes shining down— / a moving sight to look upon!

克蘭ストン訳「黒い玉」(Cranston 1993:411)

Over the dark sky, / Bead-black with glistening night, / A mist has risen: /

And the sadness of gazing / At the vaguely shimmering moon.

(4b) (原文) 茜刺 日者雖照有 夜渡月之 隠良久惜毛 (2:169)

あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜しも

日本学術振興会訳「闇」「暗らさ」 (NGS 1940:35-336)

Though the ruddy sun shines, / The fair moon, that sails / the darkness of night, / Is hidden for ever—alas!

リービ訳「真っ黒」 (Levy 1991:116)

The crimson-gleaming sun / still shines, / but that the moon is hidden / in the pitch-black night it crosses— / alas!

克蘭ストン訳「黒い玉」 (Cranston 1993:210)

Although, madder-red, / The sun illuminates the day, / Through the jet-black night / The moon no longer sails the sky; / Its dark eclipse is bitter with regret.

ダシー訳 (Duthie in Shirane 2003:71; Duthie 2014:293)

Although the striking red sun shines, / the moon crosses the black jewel night / and we grieve at its concealment

Although the striking red sun illuminates the moon that crosses the black jewel night we grieve that it is hidden.

(4c) (原文) 烏玉之 夜之深去者 久木生留 清河原尔 知鳥数鳴 (6:925)

ぬばたまの夜のふけぬれば久木生 (ひさぎお) ふる清き川原に千鳥しば鳴く

佐藤・ワトソン訳「檜扇の実」 (Sato/Watson 1981:60)

As the night deepens, black as leopard-flower seeds, on the clear river beach where everlasting trees grow, plovers call ceaselessly

コモンス訳「檜扇の実」 (Anne Commons in Shirane 2003:93)

As the berry black / night grows deeper, / on the clear river's banks / where oak trees grow / over and over the plovers cry.

日本学術振興会訳「黒い玉」 (NGS 1940:335-336)

Now the jet-black night deepens; / And on the beautiful river beach, / Where grow the hisagi-trees, / The sanderlings cry ceaselessly.

克蘭ストン訳「黒い玉」 (Cranston 1993:310)

As the night grows deep / In darkness black as beads of jet, / Where the red oak grow / Along the clean-swept river beach / The plovers keep endlessly crying.

今4種類に分けてみてきたように、繰り返すが、ひとつは「真っ黒」という意味を表す、pitch black という表現を使う訳、または、語源説の意味を取り込んで、「ひおうぎの実のように黒い」black as leopard-flower seeds とか berry black と訳すものもある。最も一般的なものは、「黒い玉」とし訳しているもので、black as beads of jet とか、bead-black とか gem-black とか black jewel とか pitch-black jade 様々に訳されている。後者の二つにおいては、枕詞の語源的な意味が英語でも表れている。このような訳は読む側にとっては、エキゾチックで詩的なイメージが湧いてくるものである。和歌の英訳として望ましいようなイメージだとも言えよう。だが、最初の「真っ黒」という意味の pitch black という言葉は、英語の日常語で、誰でも普通に使う表現なので、黒いという意味は伝えるが、特別詩的なイメー

ジが湧くような言葉ではない、ごくあたりまえの表現なのである。英訳において日常的な言葉が枕詞の英訳として使われるということは、それだけ枕詞の英訳が翻訳者の間で熟成、浸透してきたとも言え、そういう意味で、枕詞の英訳はそれなりに進化してきているとは言えるであろう。

5. 英訳枕詞の組み込み方

枕詞の表現そのものの英訳に関しては、見てきたように英語における訳しかたや単語の使い方もそれなりに熟成し、種類も豊富になり、翻訳者は慣習的な翻訳方法を身につけるようになってきたと言える。だが、実は枕詞英訳には別の問題も存在する。それは、枕詞を英訳の中で翻訳していくときにどのように、どのような位置において、英訳文の中に組み込んだら良いのか、という問題である。つまり語順の問題がおきるのである。日本語では枕詞はある言葉を導く為に使われる。その効果を失わずに英訳しようとすると、直喩として「～のような」に相当する単語を入れて訳すということになる。そして、この方法も時代とともに変化し、進化しているとも言える。このことをリービ訳とダシー訳で比べてみよう。

既述したようにリービ訳は巻一から巻五までの訳で、比較的忠実な翻訳であり、かつ文学的な雰囲気も伝えており、一見簡潔なスタイルで訳されている。そのリービ訳で、枕詞は、as とか like を使い、「のような」という直喩として訳されている。まずこのリービ訳の枕詞の扱いを、次の人麻呂長歌、軽皇子「安騎野遊獵歌」からの例から見てみる。

(原歌相当部) …玉限 夕去来者… (玉かぎる夕さり来れば) (1:45)

リービ訳は、以下の通りである。

As evening falls

faint as jewel's light (Levy 1981:61)

リービ訳の最初の As は、時間を意味し、「夕方になると」という意味である。次の行の faint as の as は、枕詞を組み込むために入れた「～のような」の意味の as である。これを直訳すると、jewel's が「玉の」であり、light は「光」で、玉の光のように、faint 「かすかだ」、という意味である。

このように直喩として訳してある場合の英語としての効果はどのようなものなのであろうか。端的に言うと、英訳全体が陳腐な表現になってしまうという欠点が生じることがある。日本語も同様であろうが、例えば安っぽい歌謡曲の歌詞に使われる文句のようになってしまい、文学的な香りが大きく後退してしまうということなのである。そのためにか、最新の万葉の英訳では、枕詞を英訳の中に組み込むときに、この「～ような」という語を持ってきて訳すのを避ける傾向がある。

次に同じ部分のダシー訳を見てみよう。シラネ編集の日本古典文学アンソロジーに載っている訳からの引用である。

… and when the gem-gleaming evening arrives (Shirane 2007:74)

随分違うということがわかるのではないか。文法的なことに触れると、ダシー訳は「玉かぎる」を形容詞の機能を果たす gem-gleaming という単語を新しく作って翻訳しているのである。gem は「宝石」で、gleaming というのは「キラキラ耀く」という意味である。その他にも日本語の語順をダシー訳は重視している。英語母語者の耳には、リービ訳は全体に柔らかく、ダシー訳はやけに力強いと感じられる。もう少し、リービ訳、ダシー訳の枕詞英訳の例を見てみる。人麻呂の「高市皇子挽歌」(1:199) から「…真木立 不破山越而 狛劍 和射見我原乃…」(真木立つ 不破山越えて 高麗劍 和射見が原の)

(2:199) の部分の英訳例を見る。まず全体のレイアウトに注目してみたい。以下先にリービ訳のページからそのまま引用する。

リービ訳 (Levy 1981:127)

crossed Fuwa Mountains,
lined with thick black pines (中略)
encamping on the plain of Wazami, (下線ワトソン以下同)
Wazami
of the Korean swords

次がダシー訳である (Shirane 2007:76)。

crossed Mount Fuwa of the evergreen pines
and on the plain of Wazami of the Korean swords”

リービ訳は全く注釈を入れずに、短い行を繋げて、ところどころイレギュラーな空白を入れて訳しているが、全体には流れるように読んでいける。このイレギュラーな字下げや空白は、単調になることを避ける助けとなっているが、ある意味、大変現代詩的なアプローチである。その点、古典歌謡の趣が薄れている。一方のダシー訳は、行数からして違っている事からも、見た目がそもそもかなり相違している。ダシー訳はシラネ編のアンソロジーからのもので、当該アンソロジーは大学教養課程での教科書としての目的を持つということもあるからか、日本語の語順にできる限り添いながら、英語の訳なされている。当該書におけるダシー訳には19箇所の脚注があり、そのうちの9箇所は枕詞の解説となっている。もう少し詳しくみてみよう。もう一度日本語を今度は二行に分けて引く。

(原歌相当部) 真木立つ 不破山越えて
高麗剣 和射見が原の (2:199)

二行に分けたのは、リービ訳ではこの二つの表現が大きく離れて訳されているからである。リービは語順を大きく変えている。ダシー訳では2つの表現が並んで訳されていて、構成も日本語原典と同じである。もう一度リービ、ダシー訳を見て頂きたいが、下線にした部分であるが、どちらも of という前置詞を使っている。この前置詞 of の使い方は、ギリシア古典におけるホメロスなどの叙事詩の英訳で良く行われているものである。そこでは of を伴って、場所や人物の名前の前に修飾の言葉が来るという例が多いので、英語母語者の耳には、何となくギリシア叙事詩を思い出せる古代的な響きが出てくる。この前置詞 of を伴う方法は、端的に言うなら、ギリシャ叙事詩のエピテット (epithet, 定型句) の英訳に良く使われる方法であり、ダシー訳はこれを数多く用いている。

リービ訳とダシー訳を比較しながら、英語になった枕詞をどのように英訳の韻文の中に組み込んでいくかということを見たのであるが、大きくは「～のような」という形で枕詞を組み込む方法はあまり行われなくなってきたと言えるようである。ただ、それでもギリシャ叙事詩の英訳に使われるようなエピテットの英訳方法である前置詞 of を用いる方法は盛んに活用されているということなどが観察できた。

おわりに

以上、比較的新しい英訳三種類と枕詞の英訳に焦点を当ててみてきたが、克蘭ストン、ボビン、ダシー訳どれも古代文学、和歌、言語学という学問的専門的な知識を持つ三人の訳であり、そのどれも驚くほど違う翻訳を提供している。

三人の中では克蘭ストン訳がおそらくもっとも文学的であると言えよう。歌の翻訳なのだということを強く意識したものであり、克蘭ストン自身が古典和歌アンソロジーを出版しているわけであるから、万葉和歌も日本詩歌という大きな枠組みの中で捉えている翻訳である。

ボビン訳は言うなれば、散文翻訳を提供していると言える。和歌の文法的な側面に最も重点を置いており、当時の地方の方言を再構築することにボビンの万葉訳の真の目的がある。

ダシーは、シラネ編のアンソロジーと自分の研究書の中に英訳をいくつか載せているわけであるが、その英訳は先行する万葉和歌の英訳とは違うところが数多く見受けられた。

このように、この三人に代表される形で、今のところ一応万葉和歌英訳の現在をみることができるのではないと思われる。

万葉英訳の現在を押さえたところで、では問題点は何なのであろうか。それは、やはり、万葉和歌の「文学的な」翻訳への道のりはまだまだ遠いという事である。克蘭ストンの達成を乗り越えるような完訳万葉和歌の出現は、もう少し遠い将来となりそうだと感じられるのである。克蘭ストン訳でさえ、全訳ではないことから、もちろん完璧ではない。万葉和歌英訳の世界においては、まだまだ後人がしなければならない仕事が実は山のように残っているのである。

専門家と一般の読者のそのどちらをもある程度満足させるような英語による完訳万葉（出来得れば英語を母語とするかそれと同等の英語力による）が待ち望まれているといえるのである。

参考文献

- Carter 1991. Steven D. Carter. *Traditional Japanese Poetry: An Anthology*. Stanford CA: Stanford University Press, 1991.
- Chamberlain 1891. Basil Hall Chamberlain. *The Classical Poetry of the Japanese*. London: Kegan Paul, Trench, Trübner, 1891. (底本：万葉集略解) 邦訳 B・H・チェンバレン著『日本人の古典詩歌』川村ハツエ訳（七月堂 1987）
- Cranston 1993. Edwin A. Cranston. *A Waka Anthology. Volume One: The Gem-Glistening Cup*. Stanford CA: Stanford University Press, 1993.
- Dickins 1906. F. Victor Dickins. *Primitive and Mediaeval Japanese Texts: Translated Into English with Introductions, Notes and Glossaries*. 2 vols. Oxford: Oxford University Press, 1906. (底本：万葉集古義)
- Doe 1982. Paula Doe. *A Warbler's Song in the Dusk: The Life and Work of Ōtomo Yakamochi (718-785)*. Berkeley CA: University of California Press, 1982.
- Duthie 2014. Torquil Duthie. *Man' yōshū and the Imperial Imagination in Early Japan*. Brill's Japanese Studies Library, vol. 45. Leiden: Brill, 2014.
- Honda 1967. H. H. Honda (本多平八郎). *The Manyōshū: A New and Complete Translation*. Tokyo: The Hokuseido Press, 1967.
- Kojima 1994. Takashi Kojima (小島嶽). *Written on Water: Five Hundred Poems from the Manyōshū*.

- Tokyo: Tuttle, 1995.
- Levy 1981. Ian Hideo Levy. *Ten Thousand Leaves: A Translation of the Man' yōshū, Japan' s Premier Anthology of Classical Poetry*. Volume One. Princeton NJ: Princeton University Press, 1981.
- Levy 2000. Ian Hideo Levy. *Love Songs from the Man' yōshū* (『万葉恋歌』). Tokyo & New York: Kodansha International, 2000.
- Levy 2002. Ian Hideo Levy. *Man' yō Luster 万葉集: A translation with photographic images of the premier anthology of Japanese poetry*. Tokyo: P. I. E. Books, 2002.
- Levy 2004. Levy Hideo リービ 英雄. *Eigo de yomu Man' yōshū 英語でよむ万葉集*. Tokyo: Iwanami shinsho, 2004.
- NGS 1940. Nippon Gakujutsu Shinkōkai 日本学術振興会. *The Manyōshū: One Thousand Poems Selected and Translated from the Japanese*. Tokyo: Iwanami Shoten, 1940.
- Pierson 1929–1963. Jan L. Pierson. *The Manyōshū Translated and Annotated*. 20 vols. Leiden: E. J. Brill, 1929–1963.
- Satake et al. 2014. 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之編『万葉集』全5冊 岩波書店 2014.
- Sato/Watson 1981. Hiroaki Sato and Burton Watson. *From the Country of Eight Islands: An Anthology of Japanese Poetry*. Seattle WA: University of Washington Press, 1981.
- Shirane 2007. Haruo Shirane (ed.). *Traditional Japanese Literature: An Anthology, Beginnings to 1600*. New York NY: Columbia University Press, 2007.
- Sieffert 2003. René Sieffert. *Man'yōshū. Livres XIV à XX*. Paris: Publications Orientalistes de France, 2003. (巻14～20)
- Suga 1991. Teruo Suga (須賀照雄). *The Man' yo-shu: A Complete English Translation in 5-7 Rhythm*. Tokyo: Kanda Institute of Foreign Studies, 1991.
- Thwaite/Bownas 1964. Anthony Thwaite and Geoffrey Bownas. *The Penguin Book of Japanese Verse*. London: Penguin Books, 1964.
- Tsuru/Moriyama 1978. 鶴久・森山隆編『萬葉集』補訂版 桜楓社 1978年.
- Vovin 2009. Alexander Vovin. *Man' yōshū, Book 15: A New English Translation Containing the Original Text, Kana Transliteration, Romanization*. Folkstone, Kent, UK: Global Oriental, 2009.
- Vovin 2011. Alexander Vovin. *Man' yōshū, Book 5: A New English Translation Containing the Original Text, Kana Transliteration, Romanization*. Folkstone, Kent, UK: Global Oriental, 2011.
- Vovin 2012. Alexander Vovin. *Man' yōshū, Book 14: A New English Translation Containing the Original Text, Kana Transliteration, Romanization*. Folkstone, Kent, UK: Global Oriental, 2012.
- Vovin 2014. Alexander Vovin. *Man' yōshū, Book 20: A New English Translation Containing the Original Text, Kana Transliteration, Romanization*. Folkstone, Kent, UK: Global Oriental, 2014.
- Vovin 2015. Alexander Vovin. *Man' yōshū, Book 17: A New English Translation Containing the*

Original Text, Kana Transliteration, Romanization. Folkstone, Kent, UK: Global Oriental, 2015.

Waley 1919. Arthur Waley. *Japanese Poetry: The 'Uta'*. London: Lund Humphries, 1919.

Wilson 1991. Graeme Wilson. *From the Morning of the World: the First Anthology of Japanese Poetry.* London: Harvill, 1991.

Wright 1979. Harold Wright. *Ten Thousand Leaves: Love Poems from the Manyōshū.* Woodstock NY: The Overlook Press, 1979.

Yasuda 1960. Kenneth Yasuda. *Land of the Reed Plains: Ancient Japanese Lyrics from the Manyōshū* (『萬葉畫集』). Tokyo: Tuttle, 1960.

1 書誌情報はまとめて参考文献に載せてある。括弧内は、翻訳者（编者など）、出版年、ページ番号の順。

2 "to make the translations as literal as possible without violating English usage" (Vovin 2009:xv).

3 原文は、Tsuru/Moriyama 1978 による。以下同。

4 訓読は、Satake et al. 2014 を参照した。以下同。

5 シラネ氏のアンソロジーにおいては、同じ歌のダシー訳には、次のように若干の相違がある。

"Though it is but a barren field with shorn grass, / we have come here in memory / of our lord who passed away like the autumn leaves." (Shirane 2007:75)。

6 いずれの引用もディキンス訳第二巻による。なお、第一巻に「すべての万葉集に出ている枕詞」の説明が載っている (Dickins 1902: vol. 2, 257-278)。